

富山大学人文学部令和二年度卒業論文

恋愛の曖昧性遊戯性について
—富山大学生へのインタビューから—

人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号 11710157 水城璃久

<目次>

第一章	問題関心	3
第二章	先行研究	4
第三章	調査概要(インタビュー内容)	5
第四章	分析	8
第一節	拘束性	8
第一項	付き合う前と後の違い「禁止」と「権利」(飲み会や遊ぶ事に関して)	8
第二項	付き合った後の拘束の具体的内容について	10
第三項	付き合うという固定観念	11
第四項	別れ際	12
第二節	周りから受ける影響	14
第一項	付き合っていないという状態に対する周りからの非難	14
	付き合わざるおえない理由(周りを気にして)	15
第五章	考察	19
	参考文献	20

第一章 問題関心

私は恋愛を経験したことがあまりなく、恋愛について興味を持っていて、調査したいと考えていた。そこで友達との会話から、「同棲みたいなことはしているけれども、付き合っていないという関係を持っている」という言葉が出てきた。その関係、恋愛観にずっと違和感を覚えていた。「なぜ同棲までしていて付き合わないのか」と考え、この関係を持っている友達を中心に聞き出したいと感じた。その糸口として例えば、今泉の『添い寝フレンド』では、「現代の若者は承認欲求を持っている人が多い。それを誰に求めるか。友人だったり、恋人だったりするわけだがそのどちらでもないとされる『ソフレ』によって、承認欲求を満たそうとしている。そこに恋愛感情は発生しないのか？これは一概には言えない。ソフレの場合元から恋愛感情がなく、添い寝をしてからも恋愛感情は芽生えなかった。」(今泉 2017: 20) との記述があり、「承認欲求」「恋愛感情がない」「添い寝はする」などの単語が自分の中で引っかかり、どの単語も、「男女の関係の曖昧さ」に関わるものであった。また、谷本の『恋愛の社会学』では、「人間関係に置ける曖昧性、遊戯性」を『「恋愛を楽しむまたは逃げること』『友達以上恋人未満が心地いい』『恋愛はゲーム、遊びである』』(谷本 2008: 97) ということ。「好き」という気持ちを間接的に伝えたり、直接すぐには言わず、ぼかす。と記述されており、ここでも「遊戯性・曖昧性」という単語が登場している。谷本のこの部分に対しては、現代の若者の恋愛の特徴を一部分とらえていると私は認識している。つまり、『簡単には「恋人関係」という定義づけを行わない』ということが、若者の恋愛の特徴の一部分ではないか。そこで、「恋愛を定義づけたり、はたまた外したりする、人々の営み」というテーマ、例えば「はたからみたら恋愛している、付き合っているように見える関係でも、本人たちにとってはそのような関係にはないと意味づけている」という状態がなぜ生まれるのか。その原因となるものは何かを考察する。また研究を進めていくにつれて「付き合う付き合わない」を議論するのに欠かせないワードである「拘束性」「周りの目から受ける影響」について深堀していきたい。インタビューイーの状況はそれぞれ違うが、そこから分析考察をしていく。

第二章 先行研究

谷本(2008)では、「断片」としてバラバラに存在する記事を、「物語」の形に再構成して、社会に流布する「恋愛の社会的物語」をモデルとして抽出する。この物語の骨格をとらえることによって恋愛言説が過去と現在でどう変化しているのかという全体像が把握できるというものである。数人のグループに分かれ、雑誌の恋愛記事を内容別に分類わけしていく。例えば「出会い」「アプローチ」「告白」などの単語が出てきたら分類わけして物語順に配置していく。これらを年代別70年代、90年代、2000年代という三つの大きな区分に分けて変化を見るというものであった。すると「友達以上恋人未満」が心地良いという関係が増えてきているということが明らかになった。この原因の一つとして考えられることは、「結末の先送り」である。谷本はこの「結果の先送り」という行為に対して「遊び」「遊戯性」があるというふうに語っている。この「結果の先送り」が行われる原因として、1、友達以上恋人未満という位置づけをしてしまう2、恋人以外との性行為、性行為の非特別化3、恋の気持ちが変わらない4、他にもいい人がいる5、浮気6、さりげなさ、まわりくどさを楽しむの6つが考えられるとした。

また、国立社会保障・人口問題研究所の調査によれば、晩婚化未婚化の傾向は、終始一貫して初婚年齢は上がっており、未婚化も上がっているという。ここから谷本(2008)は社会意識を述べている。1つめは、結果よりもプロセスを重視する発想。恋愛に関して結果をもたらすか否かが判断基準ではなく、その経験が楽しいものであるか否かが重要となる。2つ目は、不確定であいまいな態度を志向すること。そして何かに対する態度を決定する儀礼(ここでは付き合う、結婚する、別れるなど)を先送りするということである。その理由として谷本は、予測されている未来とは違う未来を期待しているからこそ態度を決定することを避けるのではないかとしている。ここから、前述でも記した「遊び」「遊戯性」が発生しているというとらえ方をしている。

谷本の主張は、「付き合う」までの過程を楽しむための「結果の先送り」「友達以上恋人未満の関係」が今の若者の恋愛観である、もしくはその傾向が強くなっているというものであり、これは雑誌の恋愛記事を切り取り、単語を分類わけした時の単語数を根拠にしている。しかし、若者の恋愛観は本当に「遊戯性」を持ち合わせているのか。私は遊戯性はあまり見出せないのではないかと考える。そこである仮説を立てた。「今現在の恋愛は、付き合うという結論を出すことに関して意味を見出していないのではないか」という仮説である。では、今現在の恋愛でも「結果の先送り」や「遊戯性」は存在しているのか。またほかにも変化は見受けられないのかを仮説を基に分析考察していく。

第三章 調査概要

はたからみたら付き合っているようにみえても、付き合っていないと定義づけている関係性を持っていると思われる方、もしくは別れた・危機的状況にあるカップルにインタビューを行い、研究していく。インタビュー調査で対象者の語りを通して調査していく。次に記載されるのは調査対象者としてインタビューをした 3 人の富山大学生の恋愛状況やその状況まで至る経緯である。

インタビュー日時:A さん(1 回目 2019/10/16, 2 回目 2019/12/26)

:B さん(1 回目 2019/11/12)

:C さん(1 回目 2020/8/11)

インタビューの主な質問項目は以下のとおりです。

- ・付き合う前と付き合った後での相手の対応の違い
- ・付き合う前と付き合った後での自分自身の感情
- ・束縛、拘束性などの具体的な内容
- ・付き合うメリットデメリット
- ・付き合う気がないにも関わらず関係を続ける理由
- ・この関係について周りからどのように言われるか

調査対象者

A さん：富山大学4年 男性 匿名

過去に、彼女のような関係の人(半同棲経験あり)は存在したが、恋愛対象ではないと本人は定義づけている(以下お相手の女性を D さんとする)。その後関係は解消し、約 1 ヶ月半と C さんと付き合っていた。しかし追加インタビューの際に、この交際相手とも別れたことが判明。今はだれとも関係を作ってはいない。A さんの半同棲相手 D さんは、年上の女性で、社会人の方で出会いはバイト先のスタッフさんとして知り合い、その後関係を作るに至る。きっかけは、ある飲み会での出来事から始まる。D さんだけ参加していた飲み会で、女性はこの飲み会に車で来ていた。「迎えに来てほしい」と A さんをお願いをして歩きで迎えに来てもらい、A さんが女性の車を代わりに運転することになったのだが、D さんの家に送り届けた場合、そこから A さんは一人、歩きで帰宅しなければならないという悪条件があり、D さんの家には帰らずに二人でそのまま A さんの家に帰宅した。その時点では A さんも D さん側も互いに意識している様子はなかった。この出来事をきっかけに会う頻度が多くなり、週に 5、6 回 D さんが A さんの家に来る、泊まることが多くなっていった。これは完全な同棲ではなく、D さんは必ず一回実家に帰ってから A さんの家に来ている。A さんが飲み会などで家を空けているときは、D さんは A さんの家にはいかずに、実家で生活をしている。このような関係を継続してはいたものの、「付き合う」という関係に

はいたっていなかった。この状況が、約一年間続いた。Aさんは相手の女性に対して好意があったと語っていることから、Dさんに対して親密性を求めているということがわかるが、「付き合う」という結論までは決して出さなかった。また、相手の女性から付き合うこと付き合わないことに対する議論がなされようとする雰囲気になると、必ず話題をそらして、違う話題に無理やり変えるということをしていた。2020年11月現在は関係を解消している。

Bさん：富山大学3年 男性 匿名

交際経験あり。交際期間は約7か月で現在は破局。相手の女性(以下Eさんとする)との初めての出会いは、一緒のサークルで、先輩後輩として出合った。最初は、仲のいい先輩後輩という関係で、プライベートで二人きりで遊んだりご飯に行くということは全くなかった。きっかけは、出合ってから約一年後に、「サークルの友達が働いているバイト先にご飯を食べに行く。」という理由で、初めて二人での食事をしたことが始まり。これはBさんから誘ったことによって実現した。この時、BさんはEさんを全く恋愛対象としてみておらず、「ただの仲の良い先輩後輩」という感じだった。また、後日、サークル活動が終わった後に、家の方向が一緒で、たまたま帰るタイミングも一緒だったこともあり、Bさんの家に行くことになる。そこから二人で会う頻度が多くなり、頻度は週4日ほどで、Eさんは必ず自分の家に帰宅したのち、Bさんの家に来るという流れである。ここでテレビゲームなどを使って一緒に遊び遅い時間になって眠くなり、そのまま寝るという流れが多い。ここでもBさんは特に付き合いたいという気持ちはなく、「恋人というよりは友達感覚」で遊んでいた。この時Bさんは「一緒にいて落ち着く、安心する。家にいないときは話し相手がなくて寂しい気持ちになる。」と語っており、「付き合う」という気はないが、Eさんと仲よくしたいという気持ちがうかがえる。しかし、BさんはEさんと一緒に遊びはじめて2か月後、「付き合ってもいいかな」と思った瞬間があったと語る。しかし、Eさんが元彼のことをまだ気にしているという状況だったので、好意を伝えずに過ごしていて、時間がたつにつれ「付き合う」ということを考えなくなったと語る。後日、サークルのBさんの同級性である女性から、この関係に対する指摘を受けて、BさんはEさんと二人きりで家で遊ぶことをやめようと決意して、Eさんにその決断を伝える。しかしEさんは急な話の内容に納得ができず、「なんでそうなるの。ほかに言うことがあるでしょ。」とし、Bさんの告白を促すという形によってカップルとして成立する。Bさんは告白する直前まで「恋人のような感覚」を相手に抱くことはなかった。

Bさんも、異性に対する「親密性」を求めているものの「付き合う」という結論にはとても時間がかかっていることがわかる。それではなぜ「付き合う」という結論をなかなか出さないのか。その理由を次章の分析で行っていくこととする。

Cさん：富山大学3年 女性

交際経験あり。Aさんの元カノ。交際期間は一か月半。AさんがDさんと関係を持っていた時に付き合ったので、CさんとDさんはあまり関係性が良くない。Aさんとの関係は同じサークルのメンバーで先輩後輩関係。サークル内合宿をきっかけに仲良くなって一緒にお酒を飲んだり二人で会うようになる。そこから都合の良い関係性になり、Dさんにそのことを知られる。DさんにAさんのことでCさんは「もうAさんに近づかないで。嫌がらせ？」などと言われる。そこでCさんはAさんの言動について「Aさんは結局どうしたいんだろう」という疑問が浮かぶ。そしてある飲み会後の家で「Aさんは何がしたいの？」と聞いたところ、Aさんからの返答は「付き合おう」。そこからAさんとCさんの交際が始まった。交際半ばはAさんとDさんは関係を解消していた。しかし、Cさんは「付き合いたくて問いただしたわけではなく、純粋に何がしたいのか知りたかった」としており、中途半端な気持ちで付き合っていたと発言している。長くは続かないであろうと気づいていた。破局の原因はAさんが浮気をしたという噂をCさんが耳にしたからというのが一番の理由。そしてそれも信ぴょう性のある噂で事実であった。また、ある時期から急にAさんの態度が激変し、会話も会う頻度も少なくなったから。しかしCさんはあまりその理由を聞こうとはせずに別れを切り出したという。

Cさんに対するインタビューではA,Bさんとは違い、付き合っているときと別れた後という二つの状況下の拘束性・周りの目の影響をテーマにして行っている。

このインタビューイの語りを通して、今現在の若者の恋愛観を探り分析していきたい。

第四章 分析

各インタビューイの語りから、若者の恋愛観を探るという方法で分析を行う。インタビューを行っていて比較的頻度が高い言葉、表現を探り、抽出する。出てくる頻度が高いという事はそれらの言葉がABCさんの恋愛観に影響を与えているということである。したがって、影響のされ方は様々であるが、少なくとも個人の恋愛観を構成する際に影響力のある言葉、表現、に分けて調査を進めていく。結果的に多いと感じた表現は2つ見られた。1つ目は「付き合うことによる拘束性」2つ目は「第三者の目、周りの目、印象」である。ABCさん共通してこの2つから影響を受けていることが見てとれた。ここからは節に分けて分析をしていくこととする。

第一節 拘束性

ABCさんの共通点

ABCさん3名に共通していたことは、「拘束性」に対して良い印象を持っておらず、「付き合う」結論を出すときに考えなければならない項目、また「付き合った」後でも必ず影響されるということだ。それだけ影響力のある拘束性に関して分析する。

第一項 付き合う前と後の違い「禁止」と「権利」(飲み会や遊ぶ事に関して)

Aさんは「付き合う」という結論をださない理由として、「付き合う」という行為に対して「デメリット」があるということが一番重要視していた。その例として「束縛」が挙げられる。Aさんはこの「束縛」の拘束力が「付き合う前」と「付き合う後」で変化すると発言している。

Aさん：付き合わなかったら、嫌だからそういうことしないでだけど、付き合ったら、いやもう付き合ってるんだからほんとそういうことしないでって言われたらもう、そういうこと(水城：まあまあまあ。)しちゃだめやん。しちや、(水城：うんうん。)そそ付き合ってたらなかったらそういうことする、その、誰かと、女の子と遊ぶのよくないねだけど付き合ったら、遊んじゃだめになるやん。(水城：はいはい。)わかる？(水城：それは、)禁止になるから。

このAさんの語りからわかるように、「付き合う前」は束縛の拘束力が弱く、女性側から「遊んでほしくはないけどそこまで強くは言えない」状態であり、「女の子と遊ぶことがダメ」にはならないと考えていることがわかる。逆に「付き合った後」は拘束力が強くなり、「禁止」になると考えている。また、「付き合った後」ではなく、「付き合う前」の状況も聞き出した。

Aさん：=あー…束縛されたくないのかな、じゃあ。

水城：束縛されたくない。

Aさん：まあそれもあるまあ別に束縛ってさ実際にされてたんだけど、＝

水城：＝うん、されるくない？＝

Aさん：＝実際されるけど、絶対付き合ったらもっと激しい束縛になるやん。

Aさんはこのように語っており、「付き合う前」から「束縛」を受けていたと口にかけていることから、「付き合う前と付き合った後」で束縛の拘束力が変化するというのは、Aさんの感覚で相手の要求を守る「権利」か「義務」かの違いであると考えられる。Aさんは1つ前の語りで「禁止」という表現を使っていて、「付き合う前」の段階では「禁止」という表現は使っていなかったことから、明らかに付き合う前と後で拘束力が異なっていることが言える。しかし、Aさん自身、付き合う前にも束縛は受けていたという発言があることから、束縛の強弱に関してははっきりした指標がないと考えられ、付き合う前と付き合ったあとで明確な違いがあるかどうかは感覚的なものであるといえる。

続けてBさんにも拘束性に関する質問をした。

Bさん：＝ほら行くなって言われてるわけじゃないけど、行くなオーラをめちゃ出してから。

水城：あーえそれは、どっから感じ取れるの？行くなオーラ。

Bさん：嫌な顔めっちゃされます。

Bさんはこのように語っており、Bさんだけ参加する飲み会に行くことに関して、付き合った後はEさんが「言葉には出してこないけど、表情は曇らせる」といった嫌ですアピールはしてくるといえるものである。これは、Eさん側がサークルの友達と飲む機会が多く、飲みに行くのはBさんだけに限ったことではないからと仕方なく許しているということが考えられる。このことから拘束の性質として自分と相手と同じような条件でないといけなという(例えば自分は飲み会にかなりの回数行っているが、相手にはそれを許さない。などは条件が異なっている)ことが意識されていると考えられる。

また、Aさんと同様Bさんにも付き合う前のことを質問した。

Bさん：うーん、付き合う前のほうがよかったのは、えー？まあ、余計なこと言われなくていいか(笑)なんか別に(水城：あー余計なこと。)俺のことは別に言っていない感じ。

なんて言うんすか＝

水城：＝あ付き合う前は言っていないんけ。

Bさん：あそうですね

Bさんはこのように語っており、「付き合う前」までは、Eさんが表情を曇らせることもなく、その他の行動に対しても何の反応も発言もしてこなかったと語っている。

付き合う前と後で「束縛」について相手の行動の変化は見て取れるものの、Bさんはそれほど気にしてはいる様子(気にかけてはいるが、そこまでの拘束力はないと考えていた)であり相手の女性も口に出して言っていないことから、そこまで拘束力はなかったと考えられる。

また、CさんにもABさんと同様な質問をした。

Cさん：付き合う前は自由で別に付き合っていないからなにしたらいいわけで、付き合う前が一番楽しいよなきつと。付き合う前と後でだったら飲み会に行くときに相手に報告するようになったことかなあ。あとは、相手の様子をいちいち気にしてしまう。とか。

Cさんはこのように語っており、Aさん同様、付き合う前の方が付き合った後よりも自由度が高く、「付き合う前」が一番楽しいとまで表現している。ここから浮かび上がる疑問は「付き合う前の方が楽しい」にもかかわらずなぜAさんと付き合ったのかである。

以上のことから、AさんBさんCさんともに拘束力は付き合う前と後で異なると感じていることがわかるが、その感じ方はそれぞれであり、AさんCさんは、「付き合った後」のほうが束縛の拘束力が強くなると語っている。しかしAさんの語りから、付き合う前にすでに「束縛が感じられ」ており、付き合う前後の違いは相手からの要求を守らず、反論することも可能であるかそうでないかの違いであるとわかる。Bさんに関しては、「束縛」というよりは、「相手の表情」のみで口には出していないので拘束力が弱いといえる。このように拘束力の強弱は人によって様々である。

第二項 付き合った後の拘束の具体的内容について

第一項の部分でも少し触れたが、拘束性には自分と相手との平等性、つまり同じ条件でないとお互いに納得ができないものになってしまうという(Bさんの事例)語りうかがえた。これはほんの一例であり、他にどのような具体的内容があるのかを調査していく。

Cさんに拘束の具体的内容を聞き出す質問をした。

Cさん：全然女の子と二人で飲んでていいから、隠さないでねって思う。隠すっていうことはなんか悪気があるっていうことやん？だから言ってから行って？って思う。その日に

帰ってきたよとか一言 line とかしてくれれば全然いいと思う。

Cさんはこのように語っていて、やはり誰と飲み会に行くのかは気になるとのことである。また、誰と飲みに行くというのは気になるにしても、それを隠されることのほうが問題であり、隠されると怪しさや疑いを持ってしまうので連絡はしてほしいとのこと。「隠す」事によって事実とは異なる不信感を持ってしまう。また、自分だけその条件に縛られるのは不満が残るため、必ず相手(Aさん)にも同じような条件を課す必要があると考えられる。ではなぜこのような拘束性が生まれてしまうのか。この点についてインタビューしてみたところこんな返答があった。

Cさん：うん。付き合う前は気にしてもなかったし。でも付き合ってから多少気になるよな。何してるんだろうとかさ。

Cさん：そうだね、なんか多分、「付き合う」っていうまあ口約束だけど、契約を結んだみたいな感じ？それがあから、自分の意識的にも少し違う。

Cさんはこのように語っており、付き合った後では無意識に相手のことが気になるし、気にしてしまうといい、束縛をしているつもりはないが、二人の中で「当たり前なルール」が自然とできていることがわかる。また、付き合うを「口約束だけど契約」と表現しており、意識的に付き合う前とは違うと語る。改めて口約束をする事により、「付き合う」＝「前までとは違う」と意識を勝手にしてしまうという事である。

第三項 付き合うという固定観念

そしてCさんは付き合うという経験があまりなく、付き合うというのがどういうものかわからないが故に、「付き合う」という事に対しての理想があると語っている。

C:しかも周りからの見方も変わるし。なんかその時は付き合うっていうのにとらわれてた。週3くらいで会って、毎日連絡とって、みたいな固定観念にとらわれていた気がする。

Cさんはこのように語っており、Cさんは「付き合う」ことに対する固定観念があり、「付き合ったときの当たり前」「付き合っているときの会う頻度や連絡事項」に対して自身の思い込みや考えがあり、これはやらなければいけないという義務感にとらわれるとも語っている。この義務感が、相手にここまでは最低限守ってほしいという線引きになっていて、自然と拘束のような働きをしていると言える。当たり前のことだがそれは人それぞれ違うものになる。

このことから明らかとなることは、「付き合う」という行為に対してのイメージが拘束性を生み出していることだ。Aさんも元々はCさんと会う頻度も多い方(週4回~5回)であったので最初はよかった。しかし、それによってCさんは「付き合う」という行為に対しての理想、当たり前にすることが付き合う事によって構築されていき、だんだんその理想と現実のギャップを感じるようになる。それが「会う頻度」などの拘束性に繋がっているとみてとれる。

第四項 別れ際

また、AさんCさんカップルが別れ際に差し掛かった原因もこの拘束性が関係していると思われるような語りが見受けられた。

Cさん：会う頻度がそうかな。

水城：減ったの？

Cさん：減った。相手は結構会いたって言うてくるタイプの人やったんね。最初のほうは。それがなくなったってことかな、一番は。

水城：じゃあ相手から突然会おうって言うてこなくなったわけだ。

Cさん：そう。それが目に見えてわかるくらい。

水城：その要因とかは予想できない？相手がこう思ってたからだろうとか。

Cさん：急に考え出したんじゃない？知らんけど(笑)

この語りからは主にこの2つの要因が考えられる。「会う頻度の変化」をCさんが感じたことである。この前の語りのところで「付き合う際の固定観念」という言葉が出てきているが、「会う頻度」がその中に分類されており、明らかに減っていると語っている。このことから、Aさんと日頃会っていた回数の変化と、これが通常であるとCさんが無意識に考えていた「会う頻度」が減少していることによって、CさんはAさんに対して、不信感を得ている。もちろんAさんCさん同士で「毎週何回以上会う」などと頻度を明確に決めていたわけではないが、Aさんがもともと「会いたい」と口に出している性格であったがためにその頻度が急激に下がるという普通であることが普通でなくなったためCさんは違和感を感じたのだ。しかしこれもAさんにとっては「拘束」と捉えていてもおかしくないものである。このように当事者が拘束していると思っていない場合でも捉える方が拘束であると思っている可能性は十分にあるという事である。

第一節では、若者の恋愛について重要な表現である「拘束性」について分析をしてきた。

Aさん Bさん Cさん、またその相手の性格や恋愛観によって細かい違いはあるが、今回調査したことをまとめるとこの4つに分けることができる。「付き合う前後での拘束力、またその内容の相違」「拘束の具体的内容として、互いの拘束条件の一致、公平化」「付き合う事に対する期待と口約束(契約)の効力」「本人が自覚のない拘束力」である。若者層全体がこれら全てを備えているわけではないが、少なくともABCさんへの調査からこの要素がみと取れる。まとめると、「付き合う」という口約束が重みを得ており、その契約を交わすと自分自身が思っている以上に口約束によって縛られると考えられる。結果として、相手に対する無意識的なルール決めや平等性が現れ、その一例として2人の間で「拘束」が現れてくるのである。

第二節 周りから受ける影響

第一項 付き合っていないという状態に対する周りからの非難

上記の B さんの特徴でも述べたように、B さんは一度「付き合ってもいいかも」という瞬間があったと語っていることから、付き合うことに関心があるように思える。しかし、ここで重要なのは、B さんは E さんの状況（元彼のことが整理されていない状態）を考えて「付き合う」という結論を出していないということ、すなわち E さんのことを考えているということである。（この時の E さんがおかれていた状況については第三章の調査概要に記載）それは以下の語りからうかがえる。

水城:なるほどー。でも、付き合う前は、5月くらいに2人で遊びだしてー、ずーっとこれがいこうって思ってた感じ？

B:えー、でも付き合うってところにやべーって思って、普通に家呼ぶのやめようって思って、言って、一回だから普通に遊ぶのやめようとしてたけど、付き合おうってなった。

水城:ふーん、あーその、微妙な関係がよくないみたいなの？

B:普通にめんどくさい、めっちゃ言われるから。

下線部は、「B さんが E さんと付き合わずに 2 人で遊んでいる事に関して、B さんの周りの女友達や先輩からその関係を継続させるのは良くないと言われることが面倒くさい」という意味である。

このように楽しさを重要視してはいるものの、このような語りから、B さんが周りの意見を気にして、E さんとの関係を解消しようとしていることがわかる。このことから、B さんのつきあわない理由として、この関係(ここでは、週に 5-6 回家に来て一晩を過ごしているにも関わらず付き合わないという関係)はまずいことであるという自覚が B さんにはあり、関係を解消しようとしていた、または付き合うことに関しての抵抗を持っているということが見て取れる。

また、A さんに関していうと、このような語りがある。

水城:じゃあ、もし他人から2人はどういう関係なのって言われたらどうする？

A さん:いや、もう。え、他人ていうのは、あー、でもね共通の知人には…（水城:言うけど?）=何もないって。いや、あの…共通の知人には言わない。ばれたらおかしい、やばいから。

A さんはこのように語っており、付き合うという結論をわざわざ出すことに対してのメ

リットや、付き合う事に対しての重要性を感じないが故に「付き合わない」という結論を出している。また、「付き合わない」という結論を出しているにもかかわらず相手と関係を持つことに対して「バレたらやばい」と語っていることから、「付き合っていないのに関係を持つこと」は周りの目からマイナスイメージを持たれるということも自覚しているということがわかる。しかしそれを理解していたとしても、付き合うという契約にも似た口約束をすることによって関係が面倒くさくなったり不具合が生じるという考え方を A さんは持ち合わせているということがわかる。

第二項 付き合わざるおえない理由(周りを気にして)

上記にも述べた通り、A さんと B さんは、最終的には「付き合う」という決断をしている (A さんの場合は女性が異なる) が、両者共通して言えることは、「付き合うこと」に関して積極的ではないということである。このことから、「付き合わざる負えない理由がある」という可能性が存在するということが考えられる。第二項では、この理由を分析していく。

C さんに関しては第三者によって付き合っているとき、別れた後に対する影響を分析する。

A さんは、上記にも述べた通り、「付き合う」ことに対して否定的な部分があり、話題をそらしてあまり D さんとの会話でその話題には触れないようにしていた。しかし、D さんと関係を解消したあと、他の人(C さん)と付き合うという行動をとっている。そして、A さんの語りにはこのようなものがある。

A: まあでも、全然人と付き合ってたから、一回付き合ったらなんか変わるかなって思って、変わるかもしれんって思って付き合ってたのはちょっとあるかもしれない。付き合ってみるか、まあちょっと、いったん落ち着いてみるかと。(水城: うん。) そういうちょっと、意味わからん事せんと、付き合ってみますかってなって、付き合ったけど。

A さんはこのように語っており、これは D さんと関係を持っていた時に周りの人から、この関係についてあまりよく思わない方(A さんと同じサークルのメンバーやバイト先のメンバー)が多くいて、そのことを A さん自身も自覚していた。(第二節の第一項に記載)それに加えて、A さんは「付き合うこと」に関して否定的な意見を持っていたのだが、D さんと関係を解消し、一時の心の揺れのようなものが起こり、「付き合う」事に対して A さん自身が「何かの心境の変化、考え方の変化」を期待しているということが推測できる。

また、そのあとの語りも気にかかった。

水城：じゃあ別にそんな別にでも、(付き合ってから) 変わらないってこと？

A：変わらんね。むしろちょっと面倒くさくなってるかな。やっぱ付き合はんほうがいいかなとは思った。

Aさんはこのように語っており、やはり「付き合う」ということに関して自分の考え方が変わるのかどうかを試していることがわかる。しかし、Aさんの意見は変わらず、「付き合う」ということに関しては否定的である。結局のところAさんの心境に変化はなかったのである。

一方でBさんが「付き合わなければならない理由」も同様に、周りの目が影響してくる。それは、この語りから明らかである。

水城：え、LINEで言ったのは、Bさんの同級生(以下Fさんとする)が言ったってこと？

B：ちがいます。俺が、Fさんと電話してて、(この関係) やめたほうがいいってあいつに言われて、でLINEでEさんに言った。

水城：そしたらEさんがBさんの家に来たってことね。

B：そうそう。

水城：まわりの意見、なんていうのかな、周りに言われて、確かにみたいなのもうやめようかなみたいなの、それいわれ始めたのは？

B：でももう一か月くらい前からずっと言われてて。

このことから、第三者であるFさんの意見を受けていることがみてとれる。Bさんは関係を解消しようとしたものの、Eさん(相手の女性)はその結論に納得が出来ず、Bさんの家に突然訪問したのである。インタビューの語りからはここまでしか言えないが、実際にはEさんがBさんに迫ったことによってBさんも拒否する事なく「付き合う」ということになった。このことから、「付き合う」という結論を出したのは、EさんがBさんに迫ったことが直接的な理由にはなるものの、Fさんの意見(付き合っていないのに男女二人で遊ぶことに対する批判)がきっかけで、「付き合わざる負えなくなった」のである。

次にCさんの語りにもこのような内容がある。

Cさん：なんかさ、めっちゃ友達から(Aさんなんか) やめときなとは言われてて、話すやん？全部あったことバーーーーって。そしたらやめときなそんな奴みたいな(笑) はっきりしなみたいに言われて、それがめっちゃ心の中にずっとあって、でお酒飲んで爆発したんやと

思う。(笑)

水城：じゃあ A さんとの関係をはっきりさせたいっていうのは、友達から言われてたのも大きく影響しているってことだね。

C さん：そう。でも別に付き合おうの返答を相手に求めてたわけじゃないんよね。

C さんはこのように語っており、A さんと関係にあったころ（当時まだ付き合う前）に C さんは自分の女友達に相談しており、その時に友達から言われた言葉である。友達からは A さんとの関係を作ることに（付き合うこと）否定的な意見が出ていて、早くこの関係を解消するか、それともはっきりと付き合うという形にするのかを決めたいと C さん自身ずっと考えていたことがわかる。この具体例でも分かるように、第三者からの意見によって、今現在の状況を変えたいと感じていたことがわかる。A さんにも C さんに対して「付き合わない」という選択肢もあったとは思いますが、都合の良い関係になっており、A さん自身そこまで付き合うということにこだわりはなく、「付き合う」ことに対してはあまり言及してほしくなかった状況下にあった。そこに C さんの言及があったことにより、「付き合う」という決断しかできなかつたと考えられる。

この事例は、A さんの悪い噂(遊び人のようなイメージ)を友達も C さん自身も聞いており、そのような人と関係を持つことは C さんのためにもよくないという意見である。C さんも A さんが自分以外の人と関係を持っているにもかかわらず、自分とも都合の良い関係にあり、かつ D さんから詰め寄られたため(第三章調査概要に記載)、2 人の女性と関係を持つ A さんの言動に疑問を抱いていた。しかし、C さん自身あまり口では言いだせない性格だったので言い出せていなかったが、友達の意見からの後押しで、A さんに聞くまでに至った。

また続けてこのような語りも見られた。

水城：じゃあ A さんに付き合おうって言われてどう思った？

C さん：わかんない。(笑) 満足したんかなあ。満足したんかもしれないその時は。でも次の日にはちょっと後悔したよね。

水城：早いな (笑) なるほど。じゃあさ、この前気軽に何でも話せる友達が 2, 3 人いればそれでいいって言ってたじゃん？

C さん：うん。

水城：なんでそう思ったのかなって思ってたさ。

C さん：なんかでもね、友達だけじゃじゃなくてなんて言うん？ある程度生活が充実してて遊べとって、ってなればそんなん彼氏なんかいらんくね？って

水城：それはさ同性でいいの？

C さん：ほぼほぼ同性でいいけど、男の人とのかかわりもなくはないよ見たいな感じがベス

ト？なんか付き合ったらだめなんよ。

上記の語りの部分で C さんから「なんか付き合ったらダメなんよ」という発言が出ており、C さんは A さんとの付き合い方が中途半端であったと感じているが故に、付き合う事に対して否定的な考えに変化している。C さんは別の語りで「付き合う」というのは一種の「口約束」と表現していることから、「付き合う」事に対してのイメージに「重みがある」「心持ちが変わる」といった考え方が存在している。また、「ある程度生活が充実して遊べていてなれば彼氏はいらない」と発言しており、C さんにとって「彼氏の存在」は、「空いた心の穴を埋める」ような役割をしており、普段から充実した生活を送っているのならわざわざ面倒くさい関係を作る必要がないという考え方に変化している。よって「彼氏なんかいらなくね？」の発言が生まれていると考えられる。

第二節では、若者の恋愛観を研究する上で重要な表現だと思われる、周りから受ける影響について分析した。ABC さんに共通していえることとしては、付き合うことを最終目的として相手との関係を持っていないということだ。その状況下で友達やサークルのメンバー、バイト先の方などの周りの人の意見に影響されて、「付き合う」「付き合わない」「関係を解消する」などの最終的な結果が出ている。結果は人それぞれで周りの影響の受け方も異なる。A さんについては、「周りの人にこの関係をバレたくないから」。B さんについては、「周りの友達にこの関係について釘を刺され、改めて考え直したから」。C さんについては、「周りの人が男性に抱いた印象に影響されたから」。このように形は異なるが、この 3 名の場合は周りの人の影響が顕著に現れているということが明らかである。

第五章 考察

先行研究でも述べたように谷本(2008)は「結果の先延ばし」についての理由として、「予測不可能な未来を楽しんでいるから」と結論付けているが、今回の分析から、少なくとも「楽しんでいるわけではない」ということがみてとれる。「付き合うという結論を出さない理由」として、Aさんの場合は「束縛される」というイメージが強く、それが事実であるかどうかは別として、そのイメージが「付き合う」という結論を「先延ばし」にしている。一方Bさんの場合は「他人の目、周りの目」が大きく影響を与えており、相手の女性が周りの批判を受けるであろうという懸念から「付き合う」という結論を出さず、関係を解消までしようとしたのである。

私が最初に立てた仮説である、「今現在の恋愛は、付き合うという結論を出すことに関して意味を見出していないのではないか」に関して考察すると、「付き合うことに意味を見出していない」というわけではなく、「付き合いたいわけではない、しかし付き合いたくないわけでもない、しかし親密性は欲する」という非常に曖昧な考え方が存在し、「恋愛関係を拒絶するわけではないが、自分の中で恋愛というものがはっきりしていない」ということがわかる。Aさんは「束縛」という観点から自分の好意をおさえることによって「付き合う」という結論を出すことはなかった。一方でBさんも「他人の目」によって女性に対する好意をおさえて、「楽しさ」だけを考え、「他人の目」によって関係の解消、つまり「付き合わない」という決断をしたが、結果付き合っている。このことから、影響される方向はさまざまである(今回は二つの例)が根底に「相手への好意」は少なからずあって、なんらかの理由が原因でそれを抑えなければならない、もしくは抑えるという判断をし、「付き合う」という結論に至っていないということが分析からわかることである。

一方でCさんへのインタビューは恋愛に関する拘束性を中心に行ってきたが、「付き合う」という口約束(契約)によって自然と2人の間には「暗黙の了解」に似た「自然に作られたルール」が必ず存在し、それはどちらのほうに偏ることもなく平等なものでなければどちらか片方に不満が生じるということが明らかになった。また、付き合うことによって明らかに相手のことを意識する時間が増えてしまうので、だんだんと拘束性が増してくるのではないかと考える。しかし、そこでお互いが隠し事をしなければよいと語っている部分もあり、相手のことを意識しているが故に相手の知らない部分をできるだけなくしたいという気持ちが働いているのではないかと考えられる。また、第三者からの影響については、当事者たちが気にしていないような内容や、他人の恋愛観を聞く場面が増えるにつれて、その内容に影響されることになる。しかし、付き合うという口約束をしなければ周りから「関係がある」という認識も薄く(Cさんの友達は、Cさんから積極的に相談をしていたので除く)、あまり恋愛については聞かれなかったため、付き合う前のほうが周りの影響を受けないと考えられる。また、Cさんは恋愛経験があまりなく、付き合う事に対しての理想を持っていて、その理想と現実の違いがあり、最終的には「付き合う前の方が楽しい」と語っている。これらの点を含め、「付き合う」という契約が一人歩きしており、理想と現実とのギャップが生

じていて「付き合う前の方がいい」という意見も出てくる。それほど今現在の若者にとって「付き合う」という口約束は重要度が高く、その言葉に振り回されていると言える。よって遊戯性はCさんの場合は存在しない。

この3人のインタビューからわかることは、3人ともに自分はこういう恋愛観を持っているとはいうものの、そこにはっきりとした信念や経験はなく、拘束や周りから受ける影響によって「付き合う付き合わない」の判断をしたり非常に曖昧な考え方を持っている。しかし、3人ともに共通していえるのは、「付き合う」という契約にも似た口約束が、自分の中でとても「重く」「面倒くさい」「ややこしい」「今までの環境が変わる」などというイメージが根本的にあるということである。このイメージによってAさんは付き合うという結論を先延ばしに、Bさんは他人に言われるまで告白せず、Cさんは付き合っただけでその翌日に後悔したりしたのである。対処の方法、感じ方は異なるが、現在の若者には「付き合う」事に対してのマイナスイメージ、重みが根強く意識されていると言う事がわかる。

先行研究では、谷本(2008)が若者の恋愛観に対して、「友達以上恋人未満」が心地よい、「曖昧性」を帯びていると記述されていた。これに対して考えてみると今回のインタビューから考えられるのは、3人とも「友達以上恋人未満(付き合わない)」を望んでいて、谷本と共通する部分があると考えられる。しかしながら、「遊戯性」の部分に関しては今回のインタビューでは伺えず、むしろ「付き合う」事に振り回されていると考えられる。「付き合う」という結論を出すか出さないかについて過剰なほど悩み、考えていることが伺える。結論として付き合う付き合わないは個人の考え方によって自由であるが、「付き合う」という契約が現在の若者にとってとても重い契約であるということは明らかである。それによって、慎重にならなければならないのであり、「付き合う」という重く、足枷になるような方法で一緒にいるという選択ではなく、「付き合う」という方法以外で相手と一緒にいようという考えに至るのである。

参考文献

- ・谷本奈穂、2008、「恋愛の社会学-「遊び」とロマンティックラブの変容」、株式会社青弓社
- ・今泉美優、2017、「添い寝フレンドとは何か-若者の承認欲求と恋愛規範」、富山大学人文学部 平成29年度卒業論文